

外国語教育の起点

—— 言調聴覚論からトマティスへ ——

渡 邊 英 夫

はじめに

ジュリアン・グリーン、アメリカ人を両親としてパリに生まれ育ったフランス学士院会員。フランス語作家にして英語の作品を書くこのバイリンガリストが、フランス語または英語で書かれ、著者自身によって翻訳された選集『ことばと分身 (*Le langage et son double*)』の中で、英語で書いた回想を再読して、次のように述べている。

「私はここで自分が全く触れていないこと、そしてフランス語で書いていたら間違いなく言ったであろうこと全てに驚かされた(……)言葉がこの種の打ち明け話を拒絶していると言ってもよかった。」(J. Green, p.225)

彼は自らの英語で書いた小説をフランス語に「翻訳」することは出来なかった。二重言語者にとって、文化や言語は一つの約束にすぎないが、一つの母国語しか持たない者にとって、母国語は自然現象である。自文化が絶対であり、その言語のコンテキストや生活のコンテキストは完結した自然法則に従うのである。

I. バイリンガル

バイリンガル(二重言語, 二言語併用)の研究は意外と新しい。今世紀初頭の交通機関のまだ発達していない時代、ウェールズの学生の二重言語現象の研究に始まった。そしてアメリカで移民を対象とし、英語を出来るだけ早く教えてアメリカ人とするために、彼等の母国語を捨てさせるという二重言語の否定を目的として発展したとされている。今日、バイリンガルの研究が、外国語学習や異文化コミュニケーションの問題と捉えられ、肯定的な評価を与えられていることと考

え合わせると皮肉である。

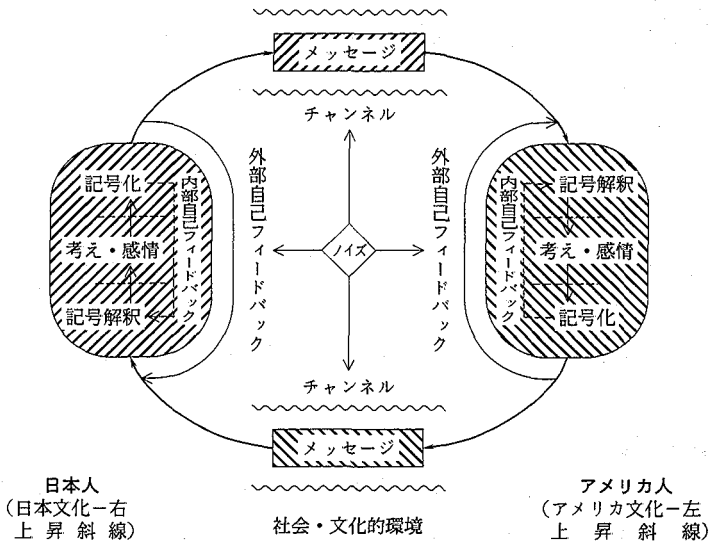
このバイリンガルとは「母語を失うことなく、母語と同様のレベルのもう一つの言語を習得した人」(L. Bloomfield), あるいは「二言語を、どちらも母語のように扱うことが出来る人」(U. Weinreich, E. Haugen) などと定義され、いずれも二つの言語を母国語として使う者で、W. A. グロータースによると、「神経=心理組織の中に、並行して言語の体系が同時に存在していること」である。概念と事物とのつながり、文章の組み立てなどを獲得していく時期(感受期)に二重言語者の場合、これらを二通り獲得する。それぞれの文化コンテクストの中で、直接、事物とのつながりを持った二つのことばが習得される。従って、各文化による語彙のずれのないこともいうまでもない。

二つの言語は全く異なった場面で学ばれる。よく成人の第2言語あるいは第3言語学習者にみられるように、ある場面で既に習得されたもう一つの言語が出てくるようなことはない。グロータースは本物の二重言語者の場合は、「場面をみると母国語が出るという自動制御=フィードバックを二つもっている」と述べ、次のような自らの経験を語っている。幼い頃からフランス語で共に育った弟が、オランダ人と結婚してつくった家庭を訪問した時のことである。当然、弟の家族とはオランダ語で話しながら、たまたま弟とふたりっきりになった場合、その言語がフランス語かオランダ語であるかは全く偶然であるという。また、オランダ語の本を読んでいる時は、当然ノートはオランダ語でとるが、その時たまたまフランス人の友人が訪ねてきて話しをする。その後、ノートを見るとなんとフランス語に変わっている。

二重言語の習得とは言語の抽象的な分析からではなく、生活の場面であるコミュニティのもつ文化的なコンテクストに基づくことが明らかである。二重言語者にとって、文化や言語は相対性を持った一つの約束事である。二重言語者が二重文化者である所以である。彼等がある一つの言語を選択すると、当然その内的態度は変化する。

これを異文化対人コミュニケーションで考えると、次のようなモデル図式で捉えることができる。(石井 敏, p.69)

図1 異文化対人コミュニケーション・モデル



日本人は日本人としての思考や感情で学習してきているわけであるから、彼がメッセージの送り手となった場合は、自分の思考や感情を言語、その他の記号体系に記号化して送ることになる。相手がアメリカ人で日本語を解さない場合は、英語という記号体系に頼ってコミュニケーションが行われる。音声言語メッセージの場合であると、アメリカ人は聴覚によってメッセージを受け、日本人とは異なるアメリカという文化コンテキストの中で育成されたコードにより記号解釈が行われる。そしてアメリカ的な思考や感情が音声英語として記号化される。日本人はそれを「自分が学習した」英語記号体系によって記号解釈を行うことになる。理解は相互の言語的記号体系および非言語メッセージに関する知識と理解力による。

フィードバックとは、送り手が記号化して発信するメッセージを自分で受信、および記号解釈し、自己調整する行為をいう。それが自らの考えや感情を外へ送り出す前の段階で内面的に働くのが、内部自己調整行為（内部自己フィードバック）。一度受けたメッセージを解釈、評価した後、必要に応じて修正や改善をし

てから再び送り出すのが外部自己フィードバックである。

ノイズ (noise) とは、コミュニケーションを妨げる要素のすべてをいう。いわゆる文化差から生じるさまざまな障害をさす。

バイリンガルとは、この対立的な受け手と送り手の二者を同時に一人の個人が持っている場合にほかならない。

「二国語常用とは、同じ神経系統のなかに、二つの平行してはいるが、別々の言語行動の型があることを意味する。これらの型には、語彙、構造、音声などという外的事実だけでなく、談話の要素の選択を支配し、意味が起因している概念群を分離する内的素質も含まれる。」(N. Brooks, p.39)

II. 言語メッセージ

言語はコミュニケーションの重要な手段であるばかりでなく、文化の特性を反映し、人間の思考、価値観、行動形式などとも深い関係をもっている。そして、その言語が音声で構成されていることは基本的な前提事項である。

さらに、言語は音声言語と文字言語に大別される。前者は言語の成立と機能にとって不可欠であるが、世界に文字を持たない音声言語だけの社会があるように、言語は二義的にのみ文字で表現されるものである。

「私達、少なくとも聴覚的記憶と言われるべきものを持つ者は四六時中自分と話しています。自分自身に耳を傾ければ、あまりきちっとはしていないものの、論理的な思考をサポートするために組み立てられて意味を持つようになった音の連続が自分の中で聞こえてきます。このようにして音声を組み立てるといことがなければ、私達はなかなか自己表現できないということになります。自分の中で作り、おもてに表れない文章や句片でも、対話者に対して発せられる音波による伝達のとく同じ要素から成り立っているのです。だから私達は常に自分自身に対する対話者と言えるのではないのでしょうか。」

(A. Sauvageot, pp.6-7)

「聴こえは、言語現象を聴きとるだけでは十分ではない。よく聴きとるためには、正しく発音しなければならない。」(P. Guberina, p.58)

ベタル・グベリナのこの言表は、「調音→聴こえ」の依存関係とは、そもそも調音器官が発声および再生することの出来ない音は、話している時に聴覚が聴きとることが困難であることを述べている。

さらに彼は、フランス語を特に専門に扱うわけではない成人の外国人が、フランスに長い間滞在していながら母国語にない音をそれに近い母国語で発音し続ける例を挙げ、このような外国人がたとえ文法の知識と豊富な語彙を身につけたとしても、実際のフランス人の会話は十分に理解していないという。

上掲引用文のオーレリアン・ソヴァジョはフランスの大言語学者アントワーヌ・メイエの使った例を挙げ、発話表現法 (elocution) における抑揚の重要性に言及している。

l'enfant sage (賢い子供)

l'enfant nage (子供が泳ぐ)

この二文の要素連続がいずれも [a₃] (-age) で終わり、形容詞の語末と動詞を区別するものが何もないため、*sage* と *nage* の働きの違いがわからない。前者の要素連続では比較的高い調子で、後者については低い調子 (断定)、もしくははっきりとした高い調子 (疑問的言表) によって、要素連続を終わらせる語が断言の支え語か否かが判断されるのである。さらにソヴァジョは次のような言表を挙げて、文レベルの要素連続が話し言葉の習慣にそって発音されなければ曖昧であると述べている。区切りを違えると明らかに意味の取り違いがおこる。

La parti communiste et l'UDR ne se sont jamais attaqués/à Marseille.

(共和党と共和国民主連合はマルセイユで決して互いに戦わなかった。)

Il semble même résulter le contraire/des déclarations faites publiquement tant par le député de Paris que par l'avocat conseil de la Garantie Foncière... (Figaro, le 6 août 1971)

(不動産保険会社の顧問弁護士によってなされたと同様、パリの代議士によっても公になされた宣言から反対のことが結論付けられるようにさえ見える。)

我々は思考するとき常に内部言語を使っている。それは音を連続させてつくる文章と同じ構造を持っている。そしていつでも有音化されうる聴覚的イメージに支えられている。それこそが聴きとりの知覚イメージそのものである。

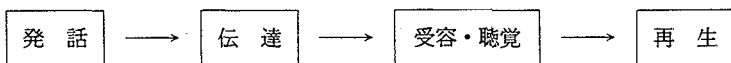
Ⅲ. コミュニケーション連鎖と介入

グベリナによると発音矯正の過程や発声に基づくコミュニケーション活動はすべて次のようなコミュニケーション連鎖の段階、あるいはその連の輪が区別される。そして音調聴覚体系では、われわれはコミュニケーション連鎖のどこにでも介入できる。そこには音調聴覚体系のさまざまな方法手段が介入に役立つはずである。

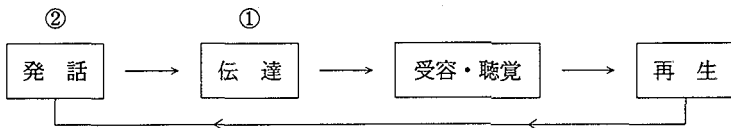
そして、それらの介入の方法にはどこに目標を定めるかによって4通りが考えられる。いずれも訓練を受ける側(発話者)の発音上での原則に準拠したものである。「聴きとり」はこの最後の輪である「受容→再生」の悪循環をいかにして解消し、再生を正しいモデルに一致させるかにあるといえる。

(P. Guberina, pp.61-62)

表Ⅰ 従来の発音の矯正過程



表Ⅱ 言調聴覚論による最適選択に基づく発音矯正の過程



例えば、母音〔Y〕(mur)の調音を唇を〔u〕の位置にして、〔i〕を発音させる例をグベリナは挙げ、視覚や触覚などにも頼ることによって多少の理論的説明を加える。この直接に再生に介入する方法は、今でも多くの語学教師がとっている最も古い方法である。しかし最後の「再生」の輪からの介入は大きな誤りは矯正できるが、微妙な差の訓練にはあまり有効とはいえない。

彼の分析による従来の発音の矯正過程における第2の介入は、学習者の「受容・聴覚」に働きかけるものである。発話者の声を大きくしたり、ある種の機械を用いる方法である。この方法は単独で使われることはなく、つねに第1の方法と結びつけられて用いられることによって、再生への直接介入よりは効果がある。しかし、訓練を受ける者の耳が不自由なため、もともと限界がある。

第3は目標を「伝達」に定め、この修正をめざすものである。それぞれの言語には固有の「耳」がある。すなわちそれぞれの国の人は異なった周波数帯で音を聞いている。そこで発話と受容の間に修正装置を介入させることによって、複合音の周波数構造や時間構造を変化させるのである。「発話」と「再生」間の一致をより正確にすることによって言調を行う。

第4の方法はコミュニケーション連鎖の最初の輪「発話」への介入である。しかし正常な発話を修正して行くと、果してその修正された“正常”な発話は再生(答)と一致できるであろうか。修正が原型を失なわずして、行われるとはどういうことか。いずれにしても、これは伝達と結びつけることによって、はじめて効果的になりうるものと思われる。

言調聴覚論からコミュニケーション連鎖をみると、コミュニケーション連鎖の4つの輪への介入の必要性が理解される。「受容への介入は、伝達への介入が通る道筋によって作られる振動を考慮に入れ」なければならず、「発話を修正するための周波数の選択は、何を使用するかによって修正される」。そして伝達への介入は、受容の状態に深く依存している。さらにスマッグを使った訓練は、受容の変化に順応して行わなければならない。

言調聴覚論のもとになるトナリテと受容者のその最適領域に基づく発音矯正の過程は表Ⅱのようになる。「再生→発話」で結ばれるが、聴覚と調音はコミュニケーションの4つの輪によって相互支配されていることがわかる。具体的な方法

は次のようになる。

①振動器, ヘッドホーン

スヴァグ機械(周波数の選択, 強度, 長さ)による人間の身体への介入(音声リズム)。

②プロソディーによる方法(リズム, イントネーション, 感情性, 囁き声, など)緊張, 隣接音, 変形発音。

IV. トマトィスの場合

このコミュニケーション連鎖と介入を耳鼻咽喉科の専門医という視点から研究し、「人間は皆言語の天才である(Nous sommes tous nés polyglottes.)」ことを論述し, エレクトロニック・イヤールの発明と独自の言語教育理論を主張・実践してきたのがアルフレッド・トマトィスである。

彼によると言語を習得するとは, 言語を「オリジナルに忠実に」復元することであり, 「その言語をとおして自己表現し, 思考し, 生きることができるように, その言語を使いこむ」ことであり, さらに言語学習とはピアニストが, ひとつの音楽的表現を, それ以上分割できない一個の総体として全体的に, そして自動的に再現する練習をつむことと同じである。勿論, そのためには外国語がもつ異なる周波数に順応できる開かれた耳を持たなければならない。

彼は「パスバンド」(les bandes passants), パスバンド内の「勾配」(les courbes d'enveloppe), 「反応時間」(Le temps de latence), それと中耳の準備にかけられる時間である「プリセッション」(Le temps de précession) という4つの観点から言語の特徴を明らかにした。そして各民族に固有の発音の力学を解きあかした。

こうして作られたのが各国語の周波数領域である。それぞれの言語を母語として話す人々の「聴きとり」における基本的な違いを示したものである。

(A. Tomatis, p.136)

表Ⅲ 各国語の周波数領域

	125	250	500	1,000	1,500	2,000	3,000	4,000	12,000HZ
ドイツ語	—————								
イギリス英語	—————								
スペイン語	—————			—————					
フランス語	—————		—————						
日本語	—————			—————					
アメリカ英語	—————			—————					
ロシア語	—————								

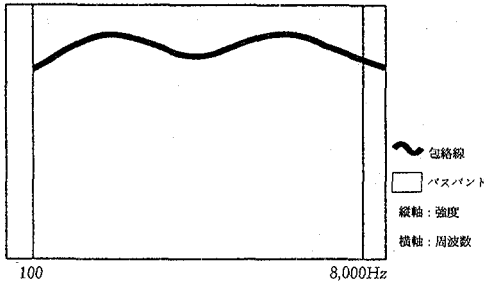
これによると、フランス人の耳は100～300と1,000～2,000ヘルツ、ドイツ人の耳が聞くことのできる音の幅は100から300ヘルツまでで、パスバンドが広いことがわかる。さらにロシア人の場合は11オクターブにもおよぶスペクトルを持ち、100から8,000ヘルツにまで及ぶことがはっきりした。従ってこの言語集団に属する人は、この周波数領域の実に多くの言葉を容易に習得できることがわかる。さらに彼等のエスノグラムをみると、全周波数帯において上昇、下降の勾配が見られ、反応時間も175ミリセカンドと長いため、他言語の要素に対する豊かな分析力に恵まれている。彼等がいかにポリグロットになりうるかが納得される。

イギリス人については、2,000～12,000ヘルツの音を聞くことができる。エスノグラムを見ると高音に対する感度が高く、きめ細かい。歯擦音の豊かさはこのためであるし、体系的二重母音化の原因もここにあると思われる。さらに低音域がほとんど聞こえないため、結果的に音域が広いとはいえない。一方われわれ日本人の耳に聞こえる周波数帯は500～2,000ヘルツ。決して狭いわけではない。

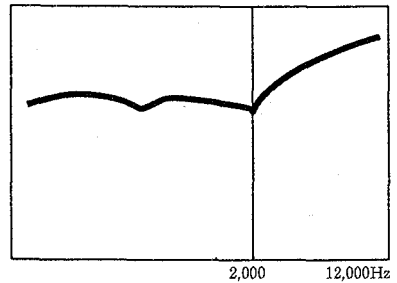
自分の周波数帯以外の音は全く聞こえないわけではないが、当然その音に対する知覚は弱まる。聞こえないことは繰り返して言うことはできないし、発音することは難しい。

さらにトマティスは、耳が聴きとりを開始するまでの時間が測定可能値であり、各国別また年齢によって差のあること、また、言葉の流れやアクセントの強勢などに影響を与えるという。この「反応時間」は純粹に神経学的な第3のパラメーターである。

図Ⅱ スラブ語のエスノグラム



図Ⅲ イギリス英語のエスノグラム



さらに第4のカギは「プリセッション」である。これは気導に対する骨導の時間的な遅れをいうが、「この時間差から聴覚器官が受け取る音に対して、内耳、特に前庭の機能に特有の予測現象を生じ」、聞き取りの力学の基本に深く関与していると説明している。そのためには単に「聴く」のではなく「聴きとる」こと（耳、次いで神経組織に届いたメッセージに、同意または拒否といった参加すること）こそが必要で、それが外国語学習を可能にする。すなわち「聴きとる」とは、どんな力をもってしても真につくりだすことの出来ない開放された状態で、他者に向かって扉を開くということであり、人間を宇宙の偉大な法則との直接的コミュニケーションに導く。このコミュニケーション能力こそが、聴きとりの直接的帰結である。なぜなら「話すということは、本質的には他者を聴きとり、その談話を理解し、賛同し、思考の源泉となる一連のイメージを追うことである」からである。

トマティスはパスバンドを変えることによって、その言語に特有の波長を受け入れ、感覚神経細胞が選択的に刺激される条件付けをするためにエレクトロニック・イヤを開発した。そしてこのエレクトロニック・イヤが聴取・発声自己制御回路に介入されることによって、無意識の模倣が引き起こされるようにしたのである。その効果はめざましく、拡張された聴覚から聴覚スペクトルが広がり、外国語のパスバンドが容易にとりこまれるようになった。

おわりに

従来「文法講読法」という外国語教育がながらく行われてきた。いわゆるテキ

ストを逐語的に分析，その意味を日本語に「翻訳」というものである。この文法的前提には外国語の文章は必ず理解できるはずである。それも日本語で理解（翻訳）できるという確信がある。

言語のコンテクストとは，その言語固有の神経回路をいうのであるから，仏文和訳や和文仏訳においては日本語にない冠詞や，名詞や形容詞の性別，さらには接続法などは無視されるか，説明を加えなければ理解されない。実はこれは日本語での強固な理解がはかられることであり，フランス語を学びながら，逆にフランス語ではなく，日本語の神経回路を強化し，重くしていることに他ならない。

人が言語を学習しようとする最大の動機はコミュニケーションすることであることは言をまたない。それも他人とだけでなく自分自身の思考とコミュニケーションすることである。トマティスという「言語とはいかなるものであれ，聴覚器官と，“体の鍵盤”に沿って存在する神経組織全体を感知装置として動員するものである」と。場面を作らなければ言語は母国語にならない。言語の抽象的な分析能力はあるレベル以上の言語コンテクストやそれを支える生活コンテクストが前提であって，それらの蓄積の上にはじめて育まれるものである。

私達は「話す」前に「聴きとる」こと，そして口語表現のための文法を学ぶべきである。成人学習者にとって，結局，母語は避けるべき障害でしかなく，決して妥協すべき妨害者であってはならない。

(1994.6.11)

【参考文献】

- Bloomfield, L. *Language*, Allen & Unwin, 1935
(L. ブルームフィールド『言語』大修館, 1962年)
- Brooks, N. *Langage and langage learning*,
Harcourt Brace Javanovich Inc., 1964
(N. ブルックス『言語と言語学習』大修館, 1972年)
- Green, J. *Le langage et son double*, Seuil, 1987
- Guberina, P., *Audition et articulation à la lumière de la méthode*
Gospodnetic, J. *Verbo-tonale*, Proceeding of XIIth International Speech
and Voice Therapy Conference, Padva, 1963
(ペタル・グベリナ, コギ・ゴストポドネティッシュ「言調聴覚論
から見た聴こえと調書」, クロード・ロベルジュ編著『発音矯正
と語学教育』大修館, 1979年)

- Haugen, E. *The Norwegian Language in America*, Pennsylvania Univ. Press, 1953
- Reboulet, A. *Guide pédagogique pour le professeur de français, langue étrangère*, Hachette, 1991
- Sauvageot, A. *Analyse du français parlé*, Hachette, 1972
- Tomatis, A. *Nous sommes tous nés polyglottes*, Fixot, 1991
(アルフレッド・トマティス『人間はみな語学の天才である』アルク, 1993年)
- L'oreille et le langage*, Seuil, 1991
- Pourquoi Mozart?*, Fixot, 1991
- Weinreich, U. *Language in Contact*, Mouton Publishers, 1953
- 石井 敏 「異文化コミュニケーションの基礎概念と研究領域」, 古田 暁監修『異文化コミュニケーション』有斐閣, 1987年
- 小野 博 『バイリンガルの科学』講談社, 1994年
- グロータース, W. A. 「バイリンガリズムについて」, 『言語』第5巻10号, 大修館, 1976年
- 佐伯智義 『日本人のためのフランス語』大修館, 1989年
- 比賀正範 「二言語併用の実態とその研究」, 『言語』第8巻10号, 大修館, 1979年
- 芳賀 純 「バイリンガルと日本人」, 『日本音響学会誌』第45巻3号, 1989年
- 山本雅代 「バイリンガリズムと誤解」, 『言語』第20巻8号, 大修館, 1991年